

青年期における生きる意味への問いに関する研究

— 自己不全感、孤独感、アイデンティティとの関連 —

亀田 研

I 【問題と目的】

ときおり人はふとしたときに、「自分は一体なんのために生きているのだろう」とか「そもそも人はなぜ生き続けなければならないのだろう」「生きることには何かの意味があるのか」「なぜ生まれてきたのだろう」といった茫漠な問いに囚われることがある（浜田 1993, 西平 1993, 菅野 1999）。このような、自分や人間が生きていくことに対する問いかけを、「生きる意味への問い」と呼ぶことにする。本研究では、この「生きる意味への問い」という現象に焦点を当てた。

このような問いは歴史的、状況的な影響を受ける問いであると考えられる。浅羽（2000）は近代社会の特に都市においては、自分とは何か、何のために生きているのかわからなくなり、教養が必要とされたと言っており、教養とは、世界の中での自分の位置づけ、自分を知るための知識であり、教養というものは、近代の産物だといっている。

しかし、一方で現代においては、青年像が以前の疾風怒涛の青年像ではなく、悩まない青年像へ変化しているとも言われている。

『自分は何者なるかの問いを、今の若者は発しない。ともあれ、楽しく生きなければ、自分の人生ではないのだ。内省の文化は「生きがい」追求の文化ともいえる。新世紀の若者は、深刻に生きがいを考えない。明るく軽やかに「今を楽しく生きる」ことに専念する。』（千石 2001）

それでは、はたして現代の青年は生きる意味への問いを問うのだろうか。

青年期は個人の成育史としては、アイデンティティを確立しつつある時期にあたる。そのような生きる意味への問いは、つまりアイデンティティの拡散そのものではないかという疑問も起こる。そこでアイデンティティと関係してくるとすればどのように関係するのかという点も検討したい。

先行研究により、人生の意味・目的を探求しているものは不適応的に（人生満足度が低く、憂うつ感が高い）なっていることが分かっている（尾崎 1997a）。また、意味を探求していることによって空しさを感じる理由が異なることも明らかになっている。「探求していること」が、むなしさの理由の記述に影響し、探求している群は

「生きる意味や死など」でむなしさを感じ、探求していない群は「日常生活によるむなしさ」を感じることを明らかにしている（尾崎 1997b）。

上記のように「生きる意味」を探求するものは、探求しないものよりも「人生満足度が低く、憂うつ感が高い」。また、「生きる意味や死など」といった実存的なものにむなしさを感じるということが分かっている。

しかし、どのような人が「生きる意味」を探求するのかは明らかではない。

このような「生きる意味」を探求する人、つまり「生きる意味を問う人」はどのような人なのかを調査することは、「生きる意味」を探求してむなしさを感じている青年や、このような問いを抱えざるを得ない青年の理解、援助に役立つだろう。

本研究では、このような問いをよく経験する人とあまり経験しない人の個人差を見ることによって、どのような要因がこのような問いを問わせる要因になるのかという要因探索を行なうことを第1の目的とする。また、生きる意味の概念とアイデンティティの概念との差異を検討することを第2の目的とする。さいごに、性差について検討することを第3の目的とする。

II 【研究1；個人内要因の探索】

目的

研究1では、個人内要因の探索を行なう。検討したのは自己不全感、パーソナリティとして（上昇志向、安全志向、理解したい傾向、諦観傾向）、科学、社会の態度として（決定論、相対主義、道徳意識の高さ、諦観傾向）である。また生きる意味への問いとアイデンティティの関係を検討する。

はじめに探索的に生きる意味を問う頻度を測定する尺度を作成した。次に、その問いを問うことを促進させる個人差要因を検討した。

方法

調査対象；N大学の大学生（文系男子28名、年齢（mean 21.1 SD4.7）／文系女子76名、年齢（mean 21.2 SD 4.1）／理系男子119名、年齢（mean 18.7 SD 0.9）／理系女子49名、年齢（mean 18.8 SD 1.8））計272名
調査時期；2001年5月下旬。

調査方法；文系は心理学、心理統計学、理系は教職の心

理学の授業時間に一斉に質問紙が実施された。

質問紙の構成；①同一性地位判定尺度（加藤，1983）12項目 加藤厚によって開発された。Marciaの理論にもとづき、同一性地位を判定するため、現在の自己投入（コミットメント）、過去の同一性の危機、将来の自己投入の希求、の3つの下位概念からなる尺度である。②自己不全感尺度（Feeling of Inadequacy Scale）（Fleming, J. S. & Courtney, B. E, 1984）36項目 ③生きるの意味への問い経験尺度 38項目 ④関連性格尺度 23項目 ⑤科学、社会への態度尺度 26項目 ①は6件法。②～⑤は5件法。

結果と考察

結果①；生きる意味への問い経験尺度の因子分析を行ったところ、3因子に分かれた。第1因子は「私は何を目標に生きていこうか？」という「目的への問い」因子、第2因子は「生きることは無駄な努力なのでは？」という「価値の懐疑」因子、第3因子は「私が死んだらこの世界は消えてしまうのか、このまま残るのか？」といった「存在の根拠への問い」因子となった。

結果②；自己不全感が高いものが「生きる意味への問い」を多く問う傾向がある。特に「目的への問い」に関しては、男子において「社会的自信不全感」、女子においては「身体的見かけ不全感」が生きる意味への問いと相関を持つことがわかった。このことは、女子において男子よりも身体的見かけが自己不全感に重要性を持っていることを示している。田場・倉戸（1995）は青年期女子において、身体像の受容が自己受容に重要な役割を持つことを示しており、また、自己受容が他者を受容することにつながることを明らかにしている。このことから考えると、女子は、身体的見かけ不全に陥ることで自己を受容できず、それによって他者をも受容できなくなり、「生きる意味への問い」を問うことにつながるということを示唆しているように思われる。

結果③；アイデンティティの危機が高いと生きる意味への問いを多く問う傾向がある。同一性地位に関する検証では、早期完了のものは、他の同一性地位に比べて問いを問う頻度が少ない。また男子においては、アイデンティティの危機と「生きる意味への問い」は関係が大きかった。しかし、女子においては男子よりも関係が小さいことが分かった。このことは、男子はアイデンティティの危機によって「生きる意味」を問うが、女子は違う要因によって「生きる意味」への問いを問うことを示唆しているものと思われる。

結果④；科学、社会への態度尺度では、傍観者的態度や相対主義的見方が高いものは「生きる意味」を問う傾向にあることが示唆された。

Ⅲ【研究2；対人関係要因の探索】

目的

研究2では、対人関係要因の探索を行なう。検討するのは、孤独感、ソーシャルサポート（今回は友人知人から得られたサポートとした）、アイデンティティの感覚である。

調査対象；N大学の大学生（文系男子49名、年齢（mean 21.0 SD4.8）／文系女子93名）、年齢（mean 20.6 SD2.96）計142名。

調査時期；2001年12月初旬。

調査方法；心理学、教職の心理学の授業時間に一斉に質問紙が実施された。

質問紙の構成；①多次元自我同一性尺度 MEIS（谷，2001）20項目「自己の斉一性・連続性」（自分が自分であるという一貫性と、時間的連続性を持っているという感覚）「対目的同一性」（自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚）「対他的同一性」（他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚）「心理社会的同一性」（自分と社会との適応的な結びつきの感覚）の4次元からなる。②孤独感の類別判定尺度 LSO（落合，1983）16項目「共感性」と「個別性」の2側面からなる尺度。③生きるの意味への問い経験尺度 38項目 ④生きる意味への問いの現在、過去経験尺度 16項目 ⑤ソーシャルサポート尺度 14項目（期待、受領、提供）①は7件法。②～③は5件法、④は「はい、いいえ」の2件法、⑤は4件法。

結果と考察

結果①；男子において、「目的への問い」ではアイデンティティの「斉一性・連続性」、「対目的」アイデンティティが低くなることで問いを促進することが分かった。女子においては、アイデンティティではなく、「個別性の気づき」つまり、人間関係上の考え方や感じ方が影響を及ぼしていることが分かった。「価値への懐疑」では男女とも同様な結果になり、アイデンティティ、孤独感ともに重要な役割を果たしているといえる。特に女子は、「個別性の気づき」が価値への懐疑を促進している。「根拠への問い」に関しては、アイデンティティの斉一性が役割を持っていた。女子に関しては、アイデンティティのどの側面も根拠への問いを問わせる影響を与えていなかった。

結果②；孤独感の「個別性」が高くなれば、成熟しているので生きる意味への問いを問わない傾向がある。これは女子において検証された。

結果③；ソーシャルサポートは、男子は「仲間のサポー

ト」の期待、受領、提供全てが3つの問いと負の相関を示していた。女子は情緒的サポートの期待と受領が「目的への問い」と「価値の懐疑」と正の相関を示していた。

IV【総合考察】

生きる意味への問いと関連する要因について

研究1の結果より、男子においては、社会的不全感、女子においては身体的見かけ不全感と問いとの関連があることがわかった。このことは「生きる意味への問い」を生起させるのは、単なる知的な問いではなく、実際につまずきから生じることを示しているように思われる。

研究2の結果より、男子では、「何のために生きるのか」と問うのは自分の一貫性や連続性、また対自的同一性「自分がなすべきことが分からない」というときに問いを発し、女子は、自分の中の一貫性などではなく、自己の個別性を自覚したときのように、他者からの分離を強く意識することと生きる意味への問いを問うことが関連すると思われる。

生きる意味への問いとアイデンティティの関係について

研究2において、アイデンティティのどの側面と「生きる意味への問い」が関係するのを見と、男子では、

「斉一性・連続性」、「対自的」アイデンティティと関わり、女子では「対他的」アイデンティティと関連している。すなわち男女で「生きる意味への問い」の意味が異なることを示唆している。つまり、アイデンティティの拡散と「生きる意味への問い」は全く同一の概念であるとは言えないことを示していると思われる。

アイデンティティ形成の性差について

『Gilligan (1982) は、アイデンティティの形成上の性差は幼児期の母親との関係の在り方によると考えている。男性にとっては、異性である母親は同一視の対象になりえず、その母親からの分離・個体化が求められる。一方、女性にとって母親は愛着の対象であり、同一視の対象でもある。そのため女性の場合は、愛着の連続的な追求が課題となるのである。この性差の結果、男性のアイデンティティは親密性によって、女性のアイデンティティは分離・個体化によって危機にさらされると論及している。』（伊藤1999）

このことから、女性是对他的アイデンティティや、孤独感の個性が重要な側面になり「生きる意味への問い」問うことになり、男性は斉一性や対自的アイデンティティが重要な側面となると考えられる。